伝説は時を超え果てしなく

ゆかりのないこの地に導いた見えない糸

福田昌氏が子どものころから聞いていたという武蔵伝説。ですが、棟札と碑文を確認するまで、福田氏はどちらかというと否定的に思っていたそうです。

「実際に拝見して目を疑いました。不思議なつながりを感じましたよ」と福田昌氏は発見当時をふり返ります。

「常立寺で古い貴重なものはほとんど残っていませんでしたが、これだけが無事でした」と棟札をながめた早瀬隨禮住職。

福田昌氏による郷土史をさかのぼる探訪は、宮本伊織らの生地、兵庫県まで足をのばすことになり、そこですべてが結びつくのでした。

宮本武蔵や伊織兄弟にとっては、本来なら、この豊前の地は何のゆかりもない場所でした。それが、偶然にも伊織の祖父で武蔵の義父にあたる小原信利の墓前に、一族が集まるかたちとなったのです。奇跡的な見えない糸、深い縁を感じずにはいられません。

やがてここ、田川郡の福智町一帯は、小笠原藩筆頭家老となった宮本伊織の采地（領地）となりました。福田昌氏は伊織という人物を次のように分析します。

「上野手永や金田手永は、46年もの間、宮本伊織が治めました。『御家老様が立ち寄っても豆腐でこと足りる』と言われ、伊織は藩内に倹約と温和の気風を養い、大豆栽培を奨励するために領民を気遣って、わざと豆腐を好んだという逸話も残されています。収穫状況の確認など、伊織は年に数回、采地の見回りをし、当然、この地にも訪れました。伊織が金辺川下流に築いた釜ノ口井手や見立大池など、その善政は今も恩恵を残しています」。

武蔵と小次郎 終わりなき伝説への浪漫

武蔵が晩年を過ごし「五輪書」を記した熊本の霊巌洞。「山全体が墓地」といわれる常立寺にも同じようなほこらがいくつもあったと伝えられ、実際にそのいくつかが現存しています。

そして、武蔵の試合の中で最も広く知られる「巌流島の決闘」。その巌流島を見おろすように、伊織が小倉の手向山に建立した武蔵の顕彰墓は、佐々木小次郎の霊をなぐさめる目的があったとも考えられています。武蔵にとって小次郎は、生涯忘れられない特別な存在だったのでしょう。英彦山修験や岩石城などの背景から、現在は佐々木小次郎「添田出身説」も有力視され、一方で、常立寺には「小次郎の墓があった」という言い伝えも残されています。はるか遠く英彦山を眺めるこの地に、武蔵が小次郎の墓を建て、手を合わせたことも決して否めません。

こうして、今もなお町に宿り続ける武蔵伝説… その果てしないロマンはつきることがありません。

武蔵 伝説の面影うつす常立寺

当時から広大な敷地を有した常立寺、山全体に墓碑が点在している。

境内に立てば兵法家を志した大山吉久やその師・武蔵の姿が浮かぶ。

敷地内には、人が居られる広さの長い洞穴がいくつか確認できる。

創建頃に植えられた大楠、武蔵や伊織らの手植えの可能性もある。